

Service の設置や Wi-Fi 環境の整備など、展示やデモンストレーションに申し分のない環境であった。

展示初日はレセプション、二日目はプレスと学生向けの展示、続いて土・日に一般公開が行われた。このような展示会で学生や子供のために日程を組む姿勢など学ぶべき点が多い。次世代を担う人々の見聞を広め、夢を育む手助けをすることは私たちの責任でもあると再認識した。会場が遊園地内のホールだったので、遊びがてらという人も大勢いると予想していたが、一般公開日には訪れた来場者の多くは NextFest を目的に来ているようで、熱心な質問や意見の対応に連日大忙しであった。

会場は、探査・移動・安全・健康・娯楽・デザイン・情報伝達といった七つのテーマに分かれており、私たちは“THE FUTURE OF HEALTH”と題した健康・医療・介護に関する革新技術の展示スペースで、新しい介護の形としてパワーアシストスーツの展示・デモンストレーションを行った。他には遠隔授業参加ロボット、電子義足、クローン猫などいずれも興味深い分野での最先端の技術が展示されていた。パワーアシストスーツは主に病院で患者を運ぶ作業をサポートすることを目的としたもので、現在製品化に向けた技術の構築段階にある。製品化には研究室では把握しきれない問題も予想されるため、このようなイベントへの出展は一般の人からの意見を伺う滅多にない機会でもある。

さて質問内容とえば、子供からは主に車を持ち上げられるの？空を飛べるの？と尋ねられた。私の方が重いものを持てると、力自慢をする人も多かったが、繰り返し作業の難しさを説明し私たちのコンセプトを理解していただけた。さらに元看護婦や医療関係者の方からのパッケージングに関する意見や、障害を持つ方からの



デモンストレーションと会場の様子（右端にスーツと操縦者）

スーツの応用についてなど多数の意見をいただき、大変参考になり、有意義な展示であった。また一般の方々が多数来場し、フェスティバルは大盛況であった。その来場者に我々のコンセプトを大いに賛同していただいたことは新たな励みとなった。

最後に私たちの展示が概ね好評であったことは Wired スタッフと当研究室学生たちのおかげであったことを申し添えます。

■ HCI International 2005

西村邦裕

東京大学

ラスベガスにて開催された会議 HCI International 2005 に参加したので報告する。この会議は 2 年に 1 回開催され、HCI(Human Computer Interaction)に関する内容を中心に、非常に多くの参加者が参加している学会である。今年は、人工都市の代表とも言えるラスベガスでの開催となった。学会自体は、22 セッション同時並行で行われ、1,672 もの発表が行われた。そのため、全部を聞くことはできないものの、個人的にはユーザインタフェースや、他の分野(教育・医学など)への応用研究のトレンドを知る良い機会となった。

本学会で注目されていた分野が Augmented Cognition である。オープニングセッションが、Keynote Address としてノーベル生理学・医学賞受賞者である Dr.Gerald M. Edelman 氏による脳科学の話に始まった。その後、ビデオによる The Future of Augmented Cognition と題した Augmented Cognition の未来像が示された。Augmented Cognition のセッションも数多くあり、ホットな話題となっていた。人間の認知能力、そしてその処理をいかに早くさせるか、という今後が期待される分野である。

VR に関するセッションも、シミュレーションやモデリング、教育システム、訓練、Emotional Content, Benefits, メンタルヘルス, Sickness-Free, Real World VR, アウェアネスなど多岐にわたり、実際の応用や評価を中心とした発表が数多く行われていた。また、知覚や認知に関係した VR の発表も数多く見られた。VR に関係する様々な発表を聞くことで、刺激を受けることができた。

ラスベガスには、派手な広告や演出が数多くあり、

その裏には本学会の関係者が興味を持ちそうな技術が数多く使われていた。いたるところで大画面ディスプレイがあり、字の形をしたLEDディスプレイや、高輝度のディスプレイなどがあつた。特に、フリーモント通りのアーケードは、1200万個のLEDを使い、アーケード全体に動画やCMが流れるというもので、通り自体が一種のVR空間になっており、非常に興味を惹かれた。また、ベラッジオホテルの前における、音楽にあわせて噴水が形を成す大規模な演出や、ミラージュホテルの前における、火や煙、噴水を利用した火山の演出など、ラスベガスの街を歩くだけでも、応用事例として勉強になるものであつた。

今回のHCI International 2007は中国・北京で開催される。なお、この会議に関する情報は以下のホームページに掲載されている。

関連サイト：<http://www.hci-international.org/>

SIGGRAPH 2005

橋本 渉

大阪工業大学

第32回コンピュータグラフィックスとインタラクティブ技術に関する国際会議がロサンゼルス・コンベンションセンターで開催された。この分野では世界最大級の会議で、今年度はおよそ2万9千人の専門家が集まったとされている。この国際会議に参加する機会を得たので報告する。

今年の基調講演の目玉は、StarWarsシリーズで有名なジョージルーカス氏である。録画・録音禁止で、入場も厳重なものだが、立ち見ができるほどの盛況であつた。前半の1時間は各Awardの授賞式である。東京大学の西田先生がThe Steven A. Coons Awardを受賞し、熱弁をふるわれた。この賞はCG界でのノーベル賞に匹敵し、アジア地域から初の輩出だそうである。後半のルーカス氏の講演は対談形式である。ルーカス氏が“Father of Digital Cinema”として紹介されたのに対し、自分は“Storyteller”であり、CG表現技術はそれを実現する手段である、と強調していたのが特に印象的であつた。基調講演に関連して、ロビーにはX-wingの模型が飾られていた。実際に撮影に使われたものではなく記念に作られたものである。別のロビーには、現在火星で稼働している地表探査機のレプリカも展示されていた。

専門家があるテーマに沿って講義するのがコースである。今年度は全部で39コースが設けられていた。最も著者の関心を引いたコースは、“Spatial Augmented Reality”である。プロジェクタ映像と実世界との融合を扱ったもので、MERLのRaskar博士とBauhaus大学のBimber博士によって編成されている。博士らはコース名と同じ題名の本を出版したばかりで、企業展示のブースでも販売されていた。販売員の話によると、サイン会を開催していたらしい。本の内容もコースに準じたものとなっている。興味がある人は参照されたい(ISBN: 1-56881-230-2)。

パネルは、様々な立場の専門家がお互いの意見を述べ、建設的な議論をする場である。パネルの一つでは、映像技術者を育成する大学側と、それを受け入れる映像プロダクション側のディスカッションが行われていた。内容を完全に把握できなかったのは残念だが、大学で教えたことと、学校の実習で作成した優秀なアニメ作品を市場に出すなど、ギャップを埋める様々な取り組みがあることが紹介されていた。

来年度はボストンでの開催が予定されている。ハーバード大学やMITなどの学術機関が集まるエリアであり、楽しみである。

<http://www.siggraph.org/s2006/>



基調講演終了後のホール



ロビーに展示されていたX-wingの模型